

## シベリア抑留者の感謝文について

島田 顕

シベリア抑留者の感謝文とは、抑留者自身が書いたソ連国家とスターリンに対する謝辞を綴った文章である。

抑留者は、飢餓、重労働、酷寒の、いわゆる「シベリア三重苦」を強いられ、ソ連国家によって奴隷の様に酷使されたことは周知のごとくであり、感謝とは遠くかけ離れていたことはいまでもない。60万人が連行され、10万人近くが抑留中に死亡。僅かな給料を与えられただけで「三重苦」に見合う対価は何もなく、都市整備、道路建設、鉄道敷設、森林伐採、炭鉱・鉱山労働（ウラン採掘も）など様々な重労働に従事させられた。だから、ソ連国家に対して恨みを持っていた抑留者が多かったことは理解に難くない。それでも抑留者たちは感謝文を書いた。その理由は、感謝文を書くことが帰国につながっていたからだ。

感謝文とは、抑留生活の間に「民主運動」の名の下に行われた社会主義洗脳活動の一環だった。恣意的、組織的に開始され、感謝文執筆・署名活動が展開された。特に帰還直前のナホトカの収容所における感謝文は、踏み絵的な意味合いも果たした。そこで不遜な態度をとれば、抑留生活に逆戻りすることもありえたのである。だからこそ抑留者は皆、早く帰りたいという一心から、挙って、嫌々感謝文を書いたことが理解できる。

感謝文の一つをご紹介します。「ソ同盟を去るに当りて収容所長及びソ側将校に対して感謝の辞を述ぶるは余の光榮とする所なり、収容所長及びソ側将校が万端の施設特に給養衛生に払はれん注意は感銘深き処にして恰も同胞の如く遇せられんは最も感謝するところなり、そのため帰還を控へたる我等日本人の身心は健全にして内地帰還後の活躍は推して見るべきものありと信ず、今やソ同盟は平和を愛する唯一の民主主義国家として、内外共に多事多端世界万民に絶大の驚讃を与えつつあり、此の際収容所長及びソ側将校に於かれては国家興隆のため益々自重自愛御奮闘あらむことを祈る次第なり、帰還後は収容所長及びソ側将校の御薫陶を範とし日本民主化のため闘はんことを期する次第なり、再言す益々身体に留意を以て御奮闘あらんことを」。

感謝文の多くには、スターリンとソ連国家に対する賞賛の言葉がつづられ、ソ連を「祖国」と呼び、日本を「帝国主義的国家」「悪の巣窟」ととらえていた。中には、共産主義イデオロギーに洗脳されて、本気でそのように考え、感謝文を書いた抑留者もいたが、多くの者たちはやはり、生きて日本に帰還するために感謝文を書いた。すべては嘘だった。それでも抑留者の一人は、帰還するためとはいえ、感謝文を書いたことを後悔している。消し去ることのできない汚点として、抑留者の心を閉ざすものの一つとして、感謝文は存在しているのである。

